

竹取物語

蓬萊の玉の枝

美しいかぐや姫に、五人の貴公子が熱心に求婚する。拒みきれなくなったかぐや姫は、五人に結婚の条件として、それぞれ難題を与える。くらもちの皇子には、伝説の島蓬萊山にある、根が銀で、莖が金で、白い玉の実がついている木の枝を持つてくるという難題が与えられた。

しかし、くらもちの皇子はなかなかの策略家で、かぐや姫を最初からだまそうと計画を立てた。難波から船出したと見せかけてこぎ帰り、人に知られないような家を用意して、世間でも評判の鍛冶細工師六人とこもり、蓬萊の玉の枝のにせものをひそかにつくらせた。後日皇子は、苦難の末に玉の枝を手に入れてきたとかぐや姫の家を訪れ、まことしやかな苦心談・冒険譚を語る。

その山のさま、高くうるはし。これや我が求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中より出て来て、銀の金錠を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。この女、「かくのたまふは誰ぞ。」と問ふ、「我が名はうかんるり。」と言ひて、ふと、山中に入りぬ。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。

10

5

その山の様子は、高く美しい。これこそ私が探し求めていた山だろうと思つて（うれしくはあるのですが）、やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、様子を見ながら航行させていますと、天人の服装をした女が、山の中から出てきて、銀の腕を持つて、水をくんでいきます。これを見て、私は船から下りて、「この山の名はなんというのですか。」と尋ねました。女は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて、私はうれしくてたまりませんでした。「このようにおっしゃるあなたは誰ですか。」と尋ねると、この女は、「私の名はうかんるり。」と言つて、すつと、山中に入ってしまいました。

その山は、見ると、（険しくて）全く登りようがありません。その山の側面を回っていくく

金、銀、瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持ちてまうで来たりしはいとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

5

と、この世にないような花の木がたくさん立ち並んでいます。金、銀、瑠璃色の水が、山から流れ出てきます。その川には、さまざまな色の玉でできた橋が架かっています。その近辺に、光り輝く木が立ち並んでいます。その中で、ここに取ってまいりましたのは、たいそう見劣りするものでしたが、姫のおっしゃったものと違ってはいけなйдらうと思ひ、この花の枝を折って持参したのです。

※1「コタウ」または「コトウ」と読む。

※2「モウ」または「マウ」と読む。

竹取の翁はこの話に感動し、だまされてしまう。困りきったかぐや姫を救ったのは、例の細工師たちであつた。くらもちの皇子が報酬を支払ってくれない、代わりに払ってほしいと、かぐや姫に訴え出たのである。こうして、皇子は自分のうそが発覚したことを恥じ、深い山に身を隠してしまった。

〈出典 『新編日本古典文学全集12』 (小学館、一九九四年)〉

【注】

- ① 金鏡 金属製の鏡。
- ② そばひら 側面。
- ③ 瑠璃色 紫色に似た、濃い青色。